
へたれ探偵 観察日記

梶本孝思



幻冬舎文庫

へたれ探偵 観察日記

目次

第一話

鹿に食べられた息子

7

第二話

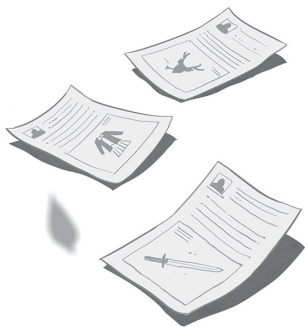
法隆寺に隠された制服

133

第三話

海なき奈良に、イルカの呪い

233



第一話

鹿に食べられた息子

【柔井公太郎の日記】
やわいこうたろう

四月二四日

今回の事件は、最初から嫌な予感がしていました。

ぼくの予感はとてもよく当たります。

絶対に、すんなりと解決できるものとは思えなかったのです。

彩音先生あやねはいつも大きな依頼を請け負ってきてくれます。

でも、そういうものはきまって難しく、恐くて、大変なものなのです。

『息子が鹿に食べられてしまった』

そんな依頼を、一体どうやって解決すればいいのでしょうか。

しかも依頼人は立派な会社の社長さんです。

ビルも綺麗で大きくて、社員さんたちも大勢おられます。

そんな中で、ムシケラのようなぼくにできることなんて何もありませんでした。

せいぜい失敗しないように、お邪魔にならないようにと、大人しく縮こまっているのが精一杯でした。

人間は、身の丈にあった仕事をすべきです。

頭が良くて、格好良くて、強くて頼もしい人。つまり彩音先生のような人間は、その能力を存分にいかせる職業に就けばいいと思います。

でもあまり頭が良くなって、格好悪くて、弱くて情けない人。つまりぼくのような人間は、ほどほどに無理のない職業に就いて、慎ましやかに生きていく方が幸せなのだと思います。ですから、今回の事件を終えてみて、やっぱりぼくは探偵には向いていないのだと分かりました。

【不知火^{しらぬい}彩音先生よりひとこと】

へたれのお前に向いている職業なんてねえよ。

奈良公園は奈良県の北部、奈良市のほぼ中央に位置する名勝地である。

その起源は西暦七一〇年、平城京遷都のうちに興福寺などの諸大寺が飛鳥の都から遷り拓いたものとされている。以来一三〇〇年以上もの長きにわたり、仏教・神道の一大拠点として信仰と観光の対象とされてきた。

現在においても県内随一の観光スポットとして知られるこの地は公園といえども広大で、周辺の寺社仏閣を含めると総面積でおよそ六六〇ヘクタールにもおよんでいる。これは東京ディズニーランドが一三個ほども入る計算となるが、一般的に奈良公園として知られている敷地はその三割ほどに過ぎず、他は春日山原始林を含む山林となっていた。

平地の公園内には全国にある春日神社の総本社となる春日大社をはじめ、『奈良の大仏』として知られる盧舎那仏を本尊とする東大寺や、三面六臂の阿修羅像が特に有名な興福寺、シルクロードの貴重な宝物を収蔵する正倉院や奈良国立博物館など、悠久なる古都の歴史に触れることのできる名所が数多く点在している。また古くより神の使い、神鹿として保護されてきた野生の鹿がいたるところに生息しており、こちらは実際に触れることもできるだろ

う。

奈良公園の西には最寄り駅となる近鉄奈良駅があり、その周辺は市街地となっている。

駅から南へと延びる東向商店街には観光客を受け入れる飲食店や土産物屋などが軒を連ね、その端は東西に延びる目抜き通り、三条通へと繋がっている。東へ少し上ると猿沢池があり、西へかなり下るとJR奈良駅まで続いているが、その距離は一キロほど離れている。近鉄奈良駅からもほぼ同距離にあり、つまり二つの駅は同じ『奈良駅』ながらもまったく連結していない。おかげで思い違いから不便を強いられる観光客の話は定番となっていた。

また市街地の南、奈良公園の西南一帯は『ならまち』と呼ばれる歴史的な街並みが広がっている。

古くは東大寺や興福寺、元興寺の仕事にたずさわる人々が居住する地域であったが、江戸時代には奉行所が置かれて発展。墨や筆、酒や布を扱う産業の町として栄えた。近年はその小ぢんまりとした趣ある町家の風景が注目を集め、新たに飲食店や雑貨店なども開店し再び盛況の兆しを見せつつあった。

『株式会社ソメヤ』はそんな『ならまち』の南、大通りを挟んでビルやマンションが建ち並び一面に社屋を構えていた。この辺りにしては背の高いビルと広い工場を併設しており、スーツ姿や作業着姿の社員たちが敷地内を行き交っている。アパレル業界の老舗として、関西

方面では特に名の知れた会社だった。

陽射しの強さと暖かさに春を感じる四月上旬の午後、その会社の五階の会議室で騒動は起きた。その日、会議室では社長の染谷益男そめやますおほか三人が新規ブランドの企画と展望についての会議を行っていた。社長以下は企画部課長の糸井秀典いといひでのり、営業部部長の木端俊彦きばたとしひこ、そして社長の息子でもある営業部の染谷圭次けいじ。圭次は二四歳の平社員だが、社長の息子という立場もあって会議にも同席させられていた。

ある程度の話し合いが進んだ頃、染谷は電話の呼び出しを受けて会議室を出た。電話の相手は織原紡績おりはらぼうせきという大阪の会社の社長で、内容は繊維業界がかかわる組合についての簡単な確認だった。社長には社長なりの役割と雑務があり、会議ひとつままならないことも多い。しかし織原紡績とは付き合いが長く、大口の取引先でもあるので疎かにする訳にもいかなかった。

二〇分ほどの電話の後、染谷は再び会議室へと引き返す。しかしなぜか部屋の前には人だかりができており、ぼそぼそと話し合う声が聞こえてきた。見れば同じフロアにある経理部の者たちらしい。一体何事かと思ひ声をかけようとすると、部屋の一番奥にいた女が振り返った。

「ああ、あなた、大変よ！」

女は染谷の妻でもある、経理部部長の染谷つや子だ。だがその顔は長年連れ添った夫ですらこれまで見たことがないほど恐怖に青ざめている。染谷が驚き戸惑っていると、彼女は人目も気にせずがりついて叫んだ。

「圭次が！ 圭次が鹿に食べられてしまったのよ！」

二

事件の三日後、『フロイト総合研究所』の不知火彩音と柔井公太郎は、同じ会議室で染谷夫妻と対面していた。フロイト総合研究所、通称フロイト総研は、研究所と名乗っているが探偵を生業とする会社である。三条通の中ほどに事務所を構えており、二人もそこに所属する者だと夫妻に名乗っていた。

「息子さんが、鹿に食べられてしまったんですか」

不知火は確認するように繰り返す。二八歳。襟の大きなシャツとブランド物らしい黒のスポーツを身に着けた、長身でスタイルのいい女。少し明るいブラウンの髪を後ろで束ねて前髪を軽く流している。フレームの赤い眼鏡の奥には大きな瞳が爛々と輝き、すっと通った鼻筋の下に形の良い唇が潤っていた。

「鹿というのは動物の鹿のことですか？ そのの、奈良公園で見かけるような？」

「そうです。奈良公園にいるような鹿です。それが圭次を、一人息子の圭次を食べてしまったんです」

つや子は声を震わせて答える。大作りな髪型と襟元のスカーフから品の良さと裕福さを漂わせている。ただその顔は暗くやつれていた。

「これは、もう少し詳しくお聞きする必要がありますが、そうですね」

不知火は鼻から息を噴いて居住まいを正す。その表情はいささかも動じてはいなかった。

「つや子さん、息子の圭次さんは鹿に、いつどこで食べられたんですか？」

「三日前です。場所はこの会社の下です」

「つやさんもその様子を見たんですね？」

「見ました。鹿が圭次を食べて、わたしの方も睨にらんできたのです。ああ……」

つや子はその光景を思い出したのか手で顔を覆う。

「まさか、まさかこんなことになるなんて……」

「それはショックだったでしょうね。で、その鹿はどうになりましたか？」

「あつという間にどこかへ逃げ去りました。きっと奈良公園にいる他の鹿たちに紛れ込んだのでしょう」

「そうですか。では、わたくしどもへの依頼というのは？」

「鹿を、あの恐ろしい鹿を捜し出してください！ 圭次かたきの仇を取ってください。お願いします、不知火先生！」

つや子は顔を上げて不知火に懇願する。冗談を言っている雰囲気でもなく、彼女の表情にはやるせない怒りと悲しみが混在していた。隣に座る社長の染谷は腕を組んで目を閉じている。白髪しらげの頭を綺麗に整えており、やや日焼けした顔には精悍せいけんさが感じられた。不知火が視線だけを右に向けると、青ざめた顔の柔井と目が合った。

「何だよ、ハム太郎」

不知火はふいにぶっきらぼうな口調を見せる。彼女は柔井の名を「公太郎」ではなく、片仮名の「ハム太郎」と呼んだ。

「いえ、その……」

柔井はぼそぼそとした声で口籠もった。二四歳。堂々とした態度の不知火とは対照的に、こちらはひどく気弱そうな若い男だった。セールで見かける鼠色のスーツを身に着け、猫背気味の痩せた体をそわそわさせて、居心地の悪そうな雰囲気ふんいきを漂わせている。ファッショントとは言えないぼさぼさの頭をうつむかせて、陰気かげそうな顔は上げようともしなかった。

「その……本当なんでしょうか？ 彩音先生」

「本当？ 何が？」

「嘘なはずがないでしょ！」

つや子は柔井に向かって声を上げる。

「人食い鹿が出たのよ！」

「はあ。で、でもそんな猛獣が、この奈良に……」

「そうよ。そんな猛獣がこの奈良にいるのよ！ このままだと観光客まで襲われて、食べられてしまうわよ！」

「ひいっ」

柔井は思わず身を仰け反らせて不知火の方を向く。

「せ、先生、どうしましょう」

「ハム太郎」

不知火が冷めた目で呼びかけるも、柔井は両手をばたばたと振り回す。

「大変なことが起きました。大事件です。いくら先生でもさすがにこれは無理ですよ」

「そんな！」

つや子はテーブルに手をつけて身を乗り出す。

「引き受けてくれると思ったから話したのよ！ 断るなんて失礼じゃないの！」

「でもそんな、うちはただの探偵ですから、猛獣退治なんて」

「わたしの息子が、圭次が食べられたのよ！」

「いやだからそういうのは、保健所とかハンターとかのお仕事だから」

「あなたじゃ話にならないわ！ 先生、お願いします！」

「ちよっと先生、も、もう帰りましょうよ。鹿が、ここにも人食い鹿がやって来ます」

「ハム太郎」

「ぐっ」

柔井はふいに呻き声を上げて声を止める。テーブルの下では不知火が彼の脇腹に肘鉄を食らわせていた。

「お前ちよっと黙ってろ」

「ごめんなさい……」

柔井公太郎は弱々しく身を縮める。不知火は顔を正面に戻すと、興奮するつや子の手を取って微笑みかけた。

「つや子さん、わたくしどもの役目は依頼人のお悩みを解決することです。困っている人を決して見捨てはいたしません」

「はい……ありがとうございます、不知火先生」

つや子は不知火の方に向き直って安堵の顔を見せる。不知火は彼女が落ち着くのを待つてから染谷の方に目を向けた。

「さて、染谷社長はどうですか？ 社長もこのご依頼内容で間違いないということですか？」

不知火が尋ねると染谷は大きく溜息をついてから首を振った。

「いや……妻が突拍子もない話をしてすまなかった。わたしの方からあらためて説明しよう」

「ではつや子さんのお話とは異なると？」

「当たり前だ。圭次は鹿に食われた訳じゃない」

「社長！」

つや子が再び声を上げる。

「そんな、鹿じゃない猛獣まで出たんですか？」

柔井も震えた声を上げる。同時に不知火がもう一発、彼の脇腹に肘鉄を食らわせた。

「依頼したいのは、失踪した圭次の捜索だ」

染谷は妻と柔井の反応を無視して話を始めた。

事件は三日前の昼、この会議室で何の前触れもなく発生した。当時、会議室では染谷と息子の圭次と、ほか二名を含めた四人で会議を行っていた。その途中で染谷は電話対応で一旦退室したが、それとともに他の二名もそれぞれが用事で席を外して、一時的に圭次が一人でここに残る間があった。おそらくそれは五分にも満たない時間だろう。その後染谷が戻ってみると、会議室の前に同じフロアの経理部の者たちが集まっていた。何事かと思ひ尋ねると、圭次が窓から飛び降りたと騒いでいた。

「圭次さんは窓から飛び降りたんですか？」

不知火は背後の窓を振り返る。そこには床から一メートルほどの高さにある窓が部屋の端から端まで六面並んでいた。ごく一般的なオフィスのガラス窓で、上はほぼ天井までの高さがある。染谷は、そうだと答えた。

「その窓の、左から三つ目からだそうだ。それでわたしも驚いてすぐに窓から顔を出して覗いてみたが、地上に圭次もいなければ落ちたような痕跡もなかったんだ。だからその時はみんなの見間違いないかと思つたが、それから今まで、圭次がどこにも見当たらないんだ」

「つまり五階の窓から飛び降りたにもかかわらず、地上には落ちずに姿を消したということですか」

「みんなの話を信じるとすれば、そういうことだ。いや、まったく訳が分からないよ」

染谷は大きく溜息をつく。

「それで前に知人の弁護士から紹介されていた、フロイト総研の不知火先生に相談しようと思つて、きょうお越しいただいたんだ」

「根津先生にはいつもお世話になっております」

不知火は先回りして答える。染谷はうなずいた。

「これまでも数々の難事件を解決してきた有能な方だと聞いている。根津先生の話によると、不知火先生は心理士としても活動されているそうだね」

「ええ。心理学を学びつつ、生駒市にある『聖エラリー総合病院』にて臨床心理士としても勤務しています。犯罪心理学に詳しい根津先生ともそこで知り合いになりました」

「探偵業と心理士を兼業で？ お若いのに大したもんだ」

「どちらも、形のないものを明らかにする点では同じです」

不知火は謙遜せずに返す。その態度に染谷は信頼感を覚えた。

「それで不知火先生、どう思う？ 圭次はどこに消えたんだらうか」